

# 「引きこもり」を防ぐ

とイラッとしてしまう自分がいませんか、と呼び掛ける。すると、母たちの瞳がキラリと光る。

「もまれにくい場所」

市井の一塾として学校を眺め、ここ数年では幾つかの公立学校にもかかわりができてきている立場として見た時に、学校に一番不足しているのは、「言うべきことは親たちにガツンと言いつつ、かたや姿勢ではないだろうか」と考える。

講演では「糾弾に幸せを眺め、ここ数年では幾つかの公立学校にもかかわりができてきている立場として見た時に、学校に一番不足しているのは、「言うべきことは親たちにガツンと言いつつ、かたや姿勢ではないだろうか」と考える。

「うちの子になんてことしてくれ」と学校を一方的

点である。



成人に達してからの引きこもり問題も深刻だ。学校では何ができるのか。学習塾の運営を通して、この問題に長く取り組み、子どもとその保護者への働き掛けを続けている高濱正伸氏（「花まる学習会」代表）に寄稿してもらった。

◆ ◆ ◆  
内閣府は、本年7月に、引きこもりの若者が全国に約70万人存在するとの調査結果を公表した。働かない子どもを抱えた家族の苦しみ、本人の苦しみの総量を考えると、国としてのとても大きな問題であることは間違いない。

## 学校の役割、親に言い切る

「うちの子になんてことしてくれ」と学校を一方的に糾弾したって、うまくいきませんよ」「それよりは、『事件化』するのは、『いつか通りの母ちゃんのご飯があるいつも通りの家庭』をキープすること、本人の心がだんだん強くなっていくのを見守ることです」と事例を踏まえて話す。この本音こそが、親たちが求めているものだ。

さらに言うと、勉強に「最大の因子は「親の言葉・態度」である。低学年時代の「親を変えよう」ということが最も大切な問題

私は、まさにこの問題への取り組みとして、学習塾「花まる学習会」を18年前に設立した。「メシを食える人」を目標として、「思考力」「国語力」「野外体験」を柱とし、小学校低学年を主たるターゲットとした。小学校低学年に焦点を絞ったのは、大学受験生

ここで大事なのは、一歩目として、地域なき現代において、「孤独な孤立した母としての子育て」に追い込まれている母親たちへの思いやりである。

大変ですね、よく頑張っていますね、だけど何だか不安で、夫がリビングで新聞でも開いている



高濱 正伸

「花まる学習会」代表